

輪袈裟の清水

たつの市新宮町

芝田から馬立に通ずる道路は、昔、因幡街道として栄えた道である。芝田の集落東の三叉路から、この道を三〇〇メートルほど南に進むと道路に添って流れる用水溝の上に、石造の橋が架けられ、その向うに大師立像と不動尊が祀られている。手前の溝のほとりに小さな囲いが施されている。

ここが、享保一二年（一七二七）の因幡

街道絵図にも所在を明記されている輪袈裟の清水である。

昔、この街道筋を往き来の旅人たちが、渴いたのどをうるおしたであろう清水の跡は、僅かに用水溝に添った小さな囲いで、その一部が残されているのみで、評判の名水としての昔日の面影とてない。

古老の言い伝えによると、この清水が湧き出したのは、遠く平安の時代だという。その年は大旱魃で、百姓たちは飲み水にも事欠くような毎日が続いた。そんなある日、ぼろぼろの法衣をまとった一人のみすぼらしい僧がこの村を訪れ、家々を托鉢して廻った。しかし、人々は収穫の見込みのない稲田を見ては

明日の飢えを思い、銭はおろか一碗の麦さえ出さずのものもなかった。僧はそれでも家々の門口に立ち経を唱えて廻り、やがて最後の貧しそうな村はずれの一軒の門に立ち経を唱えて立ち去ろうとすると、その家から若い嫁が出て来て、

「お見かけ通りの貧乏ぐらし、それに続く飢饉のため、恥かしながら今の私に出来ることはこれが精一杯です。せめて、渴いたのどをうるおして下さい」

と一杯の水をさし出した。僧はその水を押し頂いて飲むと

「うまかった。そなたの誠心こそ仏の道に通ずる心じゃ。人はどんなに苦しくとも誠心

輪袈裟の清水

だけは忘れてはならぬ」

といい、干上がった溝端に出て自分がかけた輪袈裟を取って土の上に置き、お経を唱えながら錫杖をトントン突くと、不思議やそこからこんこんと清水が湧き出した。

「せめてもの拙僧のご恩返しじゃ」

と言いつ残し、どこへともなく立ち去って行った。その話を聞いた村人たちは、その坊さまはきっと弘法大師（空海）様にちがいないと言いだし、以来誰れ言うことなく「輪袈裟の清水」というようになったと言うことである。

大正一三年、芝田村は、ここに輪袈裟清水という自然石の標柱を建てている。

